Nagoya University Psychological Support & Research Center for Human Development
http://kokoro.nagoya-u.ac.jp/

名古屋大学心の発達支援研究実践センターニュース

編集／発行
名古屋大学心の発達支援研究実践センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町　TEL:052-789-2658

KOKORO

No. 13 2021年度

特集

松本真理子先生ご退職

「退職にあたってのご挨拶～センターの思い出とともに」

松本真理子

この度退職を迎えるにあたり、センターニュース巻頭への寄稿の機会いただきましたこと、まずは深く感謝申し上げます。この機会をお借りして、センターの思い出を中心に振り返りつつ皆様へのご挨拶に代えさせていただきたいと思います。

私は現センターの前身である、発達心理精神科学教育研究センターに2008年４月、ご縁があり着任いたしました。以来14年間に渡り、センターを基盤として教育、研究をはじめ学内組織との連携など多くの貴重な体験をさせていただきました。

ここでは、ひときわ思い出深いセンターにおける４つの事柄について、振り返らせていただきます。

１．組織改組の思い出～「センター名称と実態が乖離しています」と指摘されて……

前身である発達心理精神科学教育研究センターは2001年に子どもの多様な心理的問題に対する総合的研究と実践を目的として設置されました。初代センター長である故本城秀次先生の陣頭指揮の下、児童精神医学分野への貢献やセンター付属施設である心理発達相談室の充実と発展を着実に成果として挙げてきたものと思われます。

私はそのような状況下で着任、翌年には心理発達相談室長、そして２年後には３代目センター長を仰せつかることになりました。ようやく、心理学教室や相談室体制などが見えてきたところでの新米センター長ではありましたが、一層のセンター発展を目指したい、という気概もありました。第一の課題として後述します環境整備に取り組んでいた頃のことでした。全学の要職にある方が「センターに関心を持ったので」とのことで直接訪問してくださり、永田先生と私が対応し話し合う機会がありました。「センターの名称と実態が乖離していて外からは見え難い組織になっています、なぜ改組しないのですか」。私にとっては、予想外の指摘であると同時に「外から見える組織」にしなくては発展しない、ということに気づかされる新鮮な体験でもありました。それ以降、約２年間をかけて現在の「こころの育ちと家族分野」「こころと社会のつながり分野」「こころの支援実践分野」の３分野を擁する心の発達支援研究実践センターへの改組に取り組むことになりました。改組経過においては、候補としていたセンター名称について当時の総長から却下されるなど、紆余曲折を経ての改組でもありました。しかし、その後の金井篤子センター長、永田雅子センター長の下でのセンターの発展と活躍ぶりを拝見するにつけ、改組して良かったのでは、と秘かに思っております。

２．モンゴルとのプロジェクト～大いなる自然の国モンゴルとの交流

本学とモンゴルの研究交流は既に他部局や教育学系とは活発に行われていましたが、心理学とはご縁のない状況でした。しかし、2013年にモンゴル国立教育大学の Dandii Odgerel（ダンディ・オドゲレル）先生が特別支援教育と発達障害をテーマとして研究交流を提案してくださり、その年の夏に、当時の研究科長であった松田武雄先生、副研究科長であった森田美弥子先生、発達障害プロジェクトリーダーの野邑健二先生と私の４人で情報交換を目的としてモンゴルを訪問しました。初めての

チンギスハーン国際空港ではチンギスハーンの肖像に迎えられ、大学での情報交換会では多くの先生の歓迎とたくさんの質問をいただきモンゴルの熱意を肌で感じたことを今も懐かしく覚えています。その後、モンゴルではオドゲレル先生、センターでは野邑先生を中心としての研究交流は活躍目覚ましく発展し、田中ビネーモンゴル版の完成と普及など多くの成果を出すに至っています。今や、センターにおいてなくてはならない国際共同研究交流が継続されていることは嬉しい限りです。

センターの中核の一つとなる研究交流の初期に携わらせていただけたことは私にとってモンゴルの大草原と満点の星とともに思い出深い体験となっております。

3．相談室環境整備～手狭で老朽化してきた相談室に光を

現在の地に相談室が設置されたのは、1970年、今と変わらぬ外観の臨床心理相談室として40年以上を経ていました。ここで臨床家の第一歩を踏み出した私には懐かしい相談室でもありました。一方で、それにしても外部から悩みを抱えて来談される方々を温かく迎えることのできる環境だろうかという思いが強くなったのは、相談室長を経てセンター長に着任した頃でした。院生とともに、クライエントにとってより良い物理的枠とは、について議論し、設計図を考え、そして学内の工学部建築系の小松研究室の教員や院生を交えてのディスカッションなどとても楽しく、私を含め臨床家の成長においても有意義な体験であったと思っています。また、これらの成果を院生やスタッフが積極的に学会や論文として発信してくれたことも頼もしい限りでした。

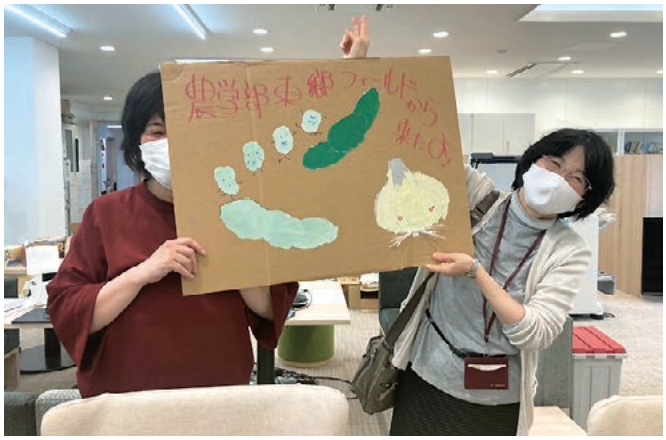
こうした環境整備は、中心となる教員や院生スタッフが代を替えて引き継がれ、第２プレイルームの改修、廊下、待合、面接室改修、第３プレイルーム新設、そして今年度には第１プレイルームの改修を終えて、ようやく10年間続いた改修の取り組みは一段落を迎えました。この一連の環境整備では、改めて院生の主体的なかかわり、それを支える教員やスタッフとの連携がひときわ嬉しく、その過程にかかわることができたことに感謝する次第です。

4．学生相談総合センターへの参画～全学学生を支える学生支援体制への改革

センター内に「こころの支援実践分野」として位置づいているものの、学生相談総合センター長を拝命するまでは、本学学生相談と私のかかわりは兼任相談員としての協力程度であったのが実情でした。縁あって学生相談総合センター長を拝命したのは2017年４月でした。拝命後、早々に学生相談が支える学生数と面接回数が極めて多い現状、年々相談が増加傾向にあること、そして2001年の学生相談総合センター設置以来、定住場所がなく移転に次ぐ移転を余儀なくされる存在であることなど、衝撃の数々に打ちのめされる思いでした。それまで10年もの間そのような現状も知らずに同じセンター教員としてのんびりしていた自分のふがいなさ、を痛感した当初でもありました。

私にとって初めての学生相談領域という心理臨床領域の実態を知り、その後は「こころの支援実践分野」センター教員である鈴木健一先生（現学生支援本部副本部長）と二人三脚で組織の充実発展を目指してきました。センター長の２年間、そしてその後の学生支援担当総長補佐（東海国立大学機構設置に伴い２年目は副総長補佐）の２年間は、おそらく本学着任以来これほど一つのことにエフォートを注いだことはない、といっても過言ではない程、学生相談領域に心血を注いだ時期でもありました。計画し実行することは本学学生に還元されるはず、という強い思いの下でのことでした。その甲斐あってか、４年間の

間に学生相談総合センターは教育研究施設から全学運営組織として位置付けられ、今年度からは学生支援本部として再改組されるに至りました。組織内も４年前に比して人材の確保、組織体制の強化が多少なりとも進んだのではないかと思っております。



学内の諸抵抗など厳しく試練の時期もありましたが、私にとっては、鈴木先生や学生相談スタッフ皆様とのチームでの組織再編と組織充実に取り組んだ経過は思い出深く充実した楽しい４年間でもありました。まだまだ課題は多いと思いますが、今後は、数年後に竣工予定の東海プラットフォームを念願の永住の地として，ますますの発展を期待しております。

以上、14年間のセンター教員としての奉職の中で、私にとって思い出深い４つの事柄を振り返らせていただきました。こうして振り返ると、いくつかのセンターの重要な転換や組織の再編などにかかわらせていただくことができ、改めて刺激的で楽しく私の人生の中でも豊かな14年間であったことを実感しております。同時にこのようなひとときを過ごさせてくださいましたセンターとセンタースタッフ皆様に深く感謝申し上げます。

大学を取り巻く社会情勢の変化、そして本学の大きな変革のさなかにあり、少ないメンバーで運営する心の発達支援研究実践センターは、今後、荒波に呑まれる小船のように翻弄されそうになることもあるかもしれません。世の中は、長引く COVID-19対応と混乱、一方で DX 社会を目指し、かつてない未知数の未来像であるように思います。

心の発達支援研究実践センターは、そうした時代に掉さして、大きな組織の中の小さな曳舟として、その小回りこそを自在に操る頼もしい存在として、ますます発展されることを心より祈念し、私も陰ながらこれからも応援させていただきます。

14年間、本当にお世話になりました。

Message

松本真理子先生のご退職によせて

教育発達科学研究科 D3　酒井麻紀子

この度はご退職、おめでとうございます。これまで長年にわたり、心理臨床家・研究者を目指す私たち大学院生に丁寧なご指導をくださり、誠にありがとうございました。

松本先生はいつも「面白いですねえ」と、物事に深い興味関心を示しておられました。例えば事例検討の場では、クライエントの何気ない発言や仕草、子どもの遊びや作品の細やかな部分に着目し、「ここにはどんな意味があるのでしょう」と私たちに問いかけ、一緒に考えてくださいました。授業や研究指導の場でも同様に、院生の発表に「興味深いですね」と温かな笑顔で耳を傾けてくださいました。そうした時の先生は、本当に“興味津々”な表情をされていて、私たちは安心感に包まれるとともに、自分が見逃していた点にハッとするのです。相手に対して敬意を払い、真の意味で興味関心をもつことが、相手や物事を理解するためにいかに重要であるのかを、松本先生はご自身のお姿をもって教えてくださいました。

いつも松本先生が仰っていた「真摯に、誠実に」というお言葉を胸に、先生から学んだことを今後の心理臨床実践に活かしていきたいと思います。これからも松本先生の興味関心は絶えぬことなく、多方面でご活躍されることと存じます。今後のご健勝をお祈り申し上げます。

第一プレイルーム改修

「公園」をテーマにした プレイルームの改修

臨床助手
小島朱里

心理発達相談室は、外来の相談室であり、一般の方をお迎えする施設であることから、2014年にはプレイルーム2の改修、2018年には第6面接室・プレイルーム3の増設を行うなど、相談室環境の整備に取り組んできました。その流れの中で、幅広い年齢層の子どもたちが使用するお部屋の環境を整えるべく、プレイルーム1の改修が提案されました。

2020年8月に、相談室スタッフとして活動する大学院生を対象に、プレイルーム1を使用する中で感じていることについてのアンケートを実施しました。広さがあって身体が動かしやすいといった意見がある一方で、暗い印象がある、落ち着いて座れる場所がないといった改善点も挙げられました。これらの意見を参考に、教員と有志の院生で構成されたワーキンググループによる検討を重ね、改修案が作成されました。また、その改修案をもとに、名古屋大学の施設課とも話し合い、専門家の意見も取り入れながら検討を進めていきました。

テーマは「公園」。プレイルーム1の大きな特徴である、身体を思い切り動かして遊べる面を維持・拡大しつつ、公園が併せ持つアレンジ可能性や適度な非日常性を備えた場所を目指すこととなりました。2021年8月中旬から約3週間、相談室を臨時閉室として工事を実施し、2021年9月に新しいプレイルーム1が完成しました。

改修後のプレイルーム1（砂場）

改修後のプレイルーム1（おもちゃ棚）

改修後のプレイルーム1（全体）

水や砂が床にこぼれることを心配しすぎず自由に遊べるように砂場や水場の壁を高くしたり、プレイルームとして使用できるスペースが広くなるよう隣接する部屋との仕切りを調整したりしました。また、収納スペースがなく床に置かれていたおもちゃを収納できるよう、壁に組み込まれた棚を作ることで、遊ぶスペースを広くするだけでなく、子どもたちが遊びたいものを自由に選びやすい環境を整えました。砂場の壁には段差をつけて、ふとした時に腰を据えて落ち着くことのできる場所を作り、部屋全体の印象が明るく落ち着いたものとなるよう、床、壁、ドアの色や素材にもこだわりました。

お部屋が新しくなるということで、電子ピアノやトランポリンなどの大型のおもちゃから合体ロボやミニカーなどの細かいおもちゃまで古いものは可能な限り買い替え、使いやすく、今の時代にあったおもちゃが導入されました。今まで使用していたものと同じものが手に入らず代替品について考えたり、今まではなかったけれどこんなものがあったらいいなという意見を集めたりする中で、大学院生がプレイルームという空間について改めて考える良い機会にもなりました。

相談室スタッフの想いがこもった新しいプレイルームの中で、子どもたちがどのような世界を繰り広げていくのかを楽しみに見守りつつ、今後の相談室環境整備の参考にしていけたらと考えています。

プロジェクト報告　発達障害児支援プロジェクト

野邑健二 特任教授

2007年度より行われている発達障害児支援プロジェクトは、地域連携、相談活動、多職種協働を軸に様々な活動を行ってきました。2013年度からはアジアの専門家と共に発達障害児支援のための実践研究活動を行っています。

1. 東海国立大学機構発達障害児支援研究コンソーシアム

東海国立大学機構内における様々な領域の発達障害研究者が集まって、アジアの発達障害研究を展開する機関とも連携して、専門情報の発信や、発達障害児支援システム構築のための学際的な共同研究を展開させ、学術・地域・国際的な観点での社会貢献を追求するためにコンソーシアムを構成しました。

コンソーシアムには、心理学（発達、臨床、認知）、教育学（特別支援）、医学（児童精神医学、作業療法学）、工学などの専門家が参加しており、基礎から臨床まで多様な視点から発達障害児支援研究を展開していきます。

来年度より、発達障害研究の専門情報発信のために、コンソーシアムとしてのウェブサイトを作成し、発達障害の最新研究情報を掲載し、連続セミナー及び国際シンポジウムを開催する予定です。

本企画は、令和3年度 東海国立大学機構大学横断研究推進プロジェクトの助成を受けて行っています。

東海国立大学機構発達障害児支援研究コンソーシアム　メンバー

名古屋大学	岐阜大学
心の発達支援研究実践センター	教育学部・学校教育教員養成課程・学校教育講座
永田雅子　野邑健二　横山佳奈	別府哲
大学院・情報学研究科・心理・認知科学専攻	教育学部・学校教育教員養成課程・特別支援教育講座
平井真洋	平澤紀子　村瀬忍
大学院・医学系研究科・総合保健学専攻	工学部・電気電子・情報工学科
五十嵐剛　佐野美紗子	寺田和憲

2. 田中ビネー知能検査モンゴル版開発プロジェクト

モンゴル国で初めてとなる標準化された知能検査である「田中ビネー知能検査モンゴル版」が、本プロジェクトとモンゴル国立教育大学の共同研究のもと、JICA の支援も得て、2020年に完成しました。この検査は2歳から12歳の子どもの知能を測ることができ、発達に支援の必要な子どもにとって重要なツールとなるものです。

今年度は、子どもの発達支援に関する専門人材が十分ではないモンゴル国の状況を踏まえて、検査の普及と適切な利用を図るために、検査者養成カリキュラムを開発し、研修会を開催しました。研修会は、セーブザチルドレンの協力も得て、5-6月、9-10月、1-2月の3回行われ、計50名に対して修了認定を行いました。検査者養成課程を修了したのは、モンゴル国内で心理士、医師、教員などの専門職として実際に子どもの支援を行っている方々で、その後既に現場で検査を活用しているとの話も伺っています。検査者養成研修は来年度も継続実施する予定です。

3. 書籍発刊「モンゴル国における知能検査の開発」（2022年3月発刊予定）

モンゴル国における知能検査開発について、明石書店より書籍を発刊します。

モンゴル国で初めての標準化された知能検査開発過程を詳述するとともに、検査開発を通して見えてきた、日本とモンゴル国の環境や文化、教育の違いとそれが発達支援に与える影響を分析し、書き記しています。

4. モンゴル国における発達障害児のスクリーニングツールの開発と実態調査

モンゴル国立教育大学とモンゴル国立医科大学との共同研究で、モンゴル国における発達障害児の実態調査を行う準備を進めています。モンゴル国にはスクリーニングツールが存在しないため、国際的に広く使われている C. ギルバーグの質問紙のモンゴル版を作成して4000人を対象に保護者及び担任への質問紙調査を行い、その中の一部のケースについてモンゴル国の医師による診断面接や田中ビネー知能検査を行って、発達障害児の実態を調べることを予定しています。本研究は、令和4年度日本学術振興会二国間交流事業オープンパートナーシップ共同研究の助成を受けて行います。

国際会議

令和4年2月4日（金）に、アジア発達支援国際フォーラム「発達支援の基盤となるアセスメントツール導入を目指して」を実施しました。本センター発達障害児支援プロジェクトでは、2013年からアジアの発達障害児に対する支援を行う共同研究をモンゴルやベトナムの専門家と協働で行っています。 発達支援を行う上で、知能検査が十分に整備されていないことが大きな課題であると感じ、検査開発や普及の取り組みを進めています。（前ページ参照）

本国際フォーラムでは、日本、モンゴル、ベトナムにおけるアセスメントツール（知能検査）の開発及び利用に関して、現状と課題を報告し、地域の文化や状況に合わせた支援の形を検討しました。まず、3名の講演者から日本、モンゴル、ベトナムの現状報告が行われました（横山佳奈氏（本センター）、D.Odgerel 氏（モンゴル国立教育大学）、Thu 氏（ハノイ教育大学））。それを受けて、田中ビネー知能検査開発者である大川一郎氏（筑波大学・田中教育研究所）より指定討論がありました。

フォーラムには、約50名の参加者があり全体討論の中でも、検査だけでなく総合的なアセスメントの重要性や、検査開発にあたっての苦労、普及における社会の理解の重要性など、活発な議論が行われました。

本フォーラムは、令和3年度名古屋大学国際会議助成金の助成を受けて行われました。

リレー企画 （兼任教員より）

心の発達支援研究実践センターニュース　第二弾

新生児医療の今昔、そして未来

早川昌弘　名古屋大学医学部附属病院総合周産期母子医療センター
（兼）心の発達支援研究実践センター

先日、日本臨床工学技士会から「周産期医療・新生児医療の変遷と未来」についての講演を依頼されました。講演の準備をすすめていくと我が国では1900年ごろから新生児医療が行われていたことを知りました。今から100年ほど前に1000ｇくらいの低出生体重児が入院管理された記録があるようです。新生児に人工呼吸器を使用できるようになったのは1970年代であり、新生児の「集中治療」は50年ほどの歴史しかありません。自分が新生児医療を始めたのは1990年ですから、自分は新生児集中治療の歴史の6割くらいの経験があるいうことです。講演の準備をしていて新生児科医30年間の記憶が蘇ってきました。30年前の新生児集中治療室は、深夜でも煌々と明かりがついており、心拍モニターの同期音があらゆる方向から昼夜関わらず聞こえてくる不夜城でした。出生体重が1000g にも満たない小さな赤ちゃんに投与する薬剤の量や点滴の量を電卓で計算そして検算をして、紙の指示書に丁寧に記載をします。赤ちゃんの状態に応じて指示をかえなければならないので、電卓を押し続け指示書を追記しつづける戦場のような当直勤務は珍しいことではなかったです。電子カルテが普及した今では計算・検算はコンピューターがおこなってくれますし、丁寧な字は必要とされず間違いなくキーボード入力をすることが求められます。デジタル時代となって新生児医療では人間味が薄くなったように思われるかもしれませんが、逆に人間味が増しています。新生児集中治療室は、心拍モニターの同期音は鳴らさず、夜の照明は最低限として赤ちゃんに優しい環境になりました。また、入院中の母子関係や赤ちゃんと家族関係が退院後の発育や養育環境に重要なことがわかってきたので、赤ちゃんが問題なく家族にうけいれてもらえるように急性期から支援をしています。新生児医療に関わって30年以上がすぎ、多くのことが変わりました。次の10年、20年では何がどのように変わっていくのでしょうか。進化し続ける新生児医療の未来が楽しみです。

新任教員の紹介

竹本美穂

2021年4月に着任いたしました、竹本美穂です。学生のキャリア支援，障害を持つ学生のキャリア支援を専門としています。

企業勤務の後、15年程前からキャリアコンサルタントとして、若者が自身の将来に関する考え方・選び方を身に着けられるよう支援をしてきました。また、臨床心理士として、小中学校でのスクールカウンセリングや、大学での学生相談・ハラスメント相談・障害学生の修学支援にも携わってきました。様々な場面で対人支援を実践する中で、先達の教えに多くの学びを得ながら、人を理解し人を支援することの奥深さを感じてきました。現在私が最も研究実践への意欲を感じているのが、発達障害を持つ学生のキャリア支援です。この分野においては、時代の流れに合わせて大きく変化が起きています。近年、発達障害とされる学生の人数が右肩上がりで増え、発達障害者の就労に関する法整備が進みつつあります。また、採用する側の企業も対応に関して模索を始めています。先達の教えを知ることはもちろん、今後に向けて為すべきことが多く存在している分野と感じています。

これまで、多くの発達障害を持つ学生達に出会ってきました。例えば、自身の障害に引け目を感じ自由な進路選択を行うことを躊躇している学生や、自身のコンディションを整えることは苦手だが専門分野に関する極めて高い能力を持つ学生。そういった学生が、自分に最も合った場を見つけ、社会参加ひいては自己実現に繋げていける仕組みを、社会全体で整えていく必要性を強く感じています。そのためには意思を持って動く多くの支援者の存在と、そういった方々の行動を援助できる確かな研究が必要であると考えています。今後も、学生全体のキャリア支援、発達障害学生のキャリア支援に力を尽くしてまいります。

横山佳奈

このたび，2021年4月に特任助教として着任いたしました，横山佳奈です。専門は臨床心理学で，これまでは，発達障害，特に自閉スペクトラム症をもつ子どもと関わってきました。関心のあるテーマは，自閉スペクトラム症をもつ子どもの社会性の発達や，対人関係の広がりについてです。

子ども同士で有意義な対人関係を築くことは，子どもが健やかに発達していくため，そしてよりよく生きていくために必要です。しかし，自閉スペクトラム症をもつ子どもは，他児との対人関係を築き，積み上げていく機会が少ないため対人関係の発達に難しさを抱える場合が多いといわれています。私も，保育園や児童発達支援センターで子どもと関わる中で，自由遊び時間に一人で延々と石を並べている子や，相手に自分の気持ちをうまく伝えられずに手が出てしまう子，他の子が遊んでいることに気づかずおもちゃを取ってしまう子など，周囲と関係を築くことが難しい子どもたちの姿を見てきました。同時に，周りの大人が，その子の気持ちを代弁したり，一人で遊んでいるところに寄り添って参加したり，隣で遊ぶ他の子との橋渡しをしたりなどの支援をすることで，他の子との関わりが生まれる場面も見てきました。このような体験から，それぞれの子どもの興味をつかみ，その子の好きな世界を大切にしながら新しい世界を広げていくことが，日常生活の中での学びや周囲との関わりにつながっていくのではないかと感じ，日常生活に根差した介入や支援の重要性を実感しました。

近年，発達障害をもつ子どもたちへの早期介入・早期支援が課題とされていることもあり，有効な支援方法や支援システムの確立が求められていると感じています。私自身，臨床の場や研究の中で，それぞれの子どもに対しての最善の関わりは何なのかを悩む日々です。臨床の場で抱いた疑問や関心を大切にしながら，研究を積み重ねていく中で，発達障害をもつ子どもたちへの支援について考えていきたいと思います。

スタッフ紹介

■センター長・こころの育ちと家族分野

永田雅子
教授・発達臨床心理学
●研究テーマ：
・周産期の母子支援
・発達障害の早期介入
・乳幼児精神保健

■こころの育ちと家族分野

金子一史
教授・発達臨床学、臨床心理学
●研究テーマ：
・産後うつ病および産後愛着障害への介入
・児童期のメンタルヘルスに関する日本とフィンランドとの国際比較研究

■こころと社会のつながり分野

松本真理子
教授・臨床心理学
●研究テーマ：
・子どものメンタルヘルス支援に関する国際比較と心理教育プログラム開発
・子どもの心理アセスメント

野村あすか
准教授・学校臨床心理学
●研究テーマ：
・子どものウェルビーイングと学校・家庭環境とのかかわり

■こころの支援実践分野

鈴木健一
教授・臨床心理学、精神分析
●研究テーマ：
・学生相談における対人関係精神分析の援用

杉岡正典
准教授・学生相談
●研究テーマ：
・大学生への心理的援助
・地域援助、コミュニティ心理学

竹本美穂
助教・就職相談
●研究テーマ：
・大学生のキャリア支援
・障害学生のキャリア支援

■発達障害児支援研究プロジェクト

野邑健二
特任教授・児童精神医学
●研究テーマ：
・発達障害の臨床
・乳幼児の発達支援
・発達障害児の家族のメンタルヘルス

横山佳奈
特任助教・臨床心理学
●研究テーマ：
・発達障害の臨床
・子どもの社会性の発達支援

2022年度予定

2022年度 招聘教員

Dinh Nguyen Trang Thu（ディン グエン トラン トゥ）先生
ハノイ教育大学特別教育学部（ベトナム国）
研究テーマ：日本とベトナムにおける発達障害児支援と特別支援教育の現状と課題
招聘期間：令和4年6月15日～令和4年7月15日

KOKORO

名古屋大学心の発達支援
研究実践センターニュース

NO.13・2021年度

●編集後記

14年間にわたってセンターの活動にご尽力いただきました松本真理子先生が、2022年3月をもってご退職となります。センターの改組、国際共同研究交流、心理発達相談室の環境整備、そして学生支援体制の強化など、先生はセンターの今につながるさまざまな活動の礎を築いてくださいました。目前の課題に深い関心を抱き、どのような環境に生きる方々に対しても「真摯に、誠実に」かかわるという先生の姿勢は、こうした活動においても一貫しておられたように感じます。今後も本学名誉教授、そしてセンターの招聘教員として、センターの活動を見守っていただけましたら幸いです。先生のお志を受け継ぎ、センターのさらなる発展に努めてまいります。

野村あすか　准教授　記